

台北街観測

日本企業が今注目する街 [1/3]

2017年8月18日 辻本 麻悠

台湾は旧来から親日家も多く、特に最大の街である台北を歩くと、ファッションやメイク、食べ物（日式グルメ）など、商業に密接する部分においても好みや感覚が日本人に近いと感じられる。またそのような背景も手伝って、アジア進出の第一歩目として、台北に出店する企業は従来から多い。そして近年は、専門店だけでなく日系ディベロッパーの進出も増えており、先日も日系企業と現地 DV が商業施設開業に向けた共同出資を発表した。このような事情からも、専門店の出店もさらに増えると予想される。今回は、日本の商業界からの注目が高まる台北の街について調査した。

台北は商業の場のバリエーションの幅（規模、グレード、形態等）が広い街だ。百貨店をはじめとする徹底したラグジュアリー志向の商業施設から、毎日開かれる庶民的な市場まで多種多様な商業形態の中から生活者はその時々目的に合った場所を使い分けている。均質化が進む日本の商業の場に慣れた日本人から見ると、それぞれ特色があり楽しいものだ。では実際、台北の人々は街や商業の場をどのように使い分けているのだろうか？

多様な商業の場

台北の商業施設は、豪華で作りこまれた共通環境デザインが印象的だ。①ラグジュアリー特化型の SC は、富裕層または観光客がメインターゲット。街の喧騒とは別世界の豪華な施設にはラグジュアリーブランドが並ぶ。次に、②ナショナルチェーン集積型の SC は、ナショナルブランドが主で、来館者は程々の所得がありナショナルブランドへの信頼が厚い人々だ。ユニクロをはじめとする日本発のブランドの取り扱いも多い。

日本からも注目されているのが、③専門店が核となり編集した大型複合店舗だ。とくに広く認知されているのが、書店を軸に編集された『誠品書店（誠品生活）』。近年、中国・蘇州や香港にも店舗網を広げており、日本進出を検討していることも発表された。その他にも鮮魚が軸となる『上引水産』、アートカルチャーが軸となった『華山 1914 文創園區』など、比較的規模も大きく特徴の際立った商業施設として定着していると言える。次に、④路面店を中心とする各エリアも街の歴史的要素や環境的要素も相まって、それぞれのカラーを出している。後述の東区エリアや富錦街などの街はファッションやライフスタイルの発信力のある街として認識されている。

また、日々の生活の中にある⑤朝市&夜市といった台北ならではの商業の形態も、台北の商業を知る上ではキーになっている。営業時間や営業形態が通常の商業施設とは異なることや、屋外での食べ歩きとショッピングの融合など、日本の商業施設では味わえない体験が提供されている。



▲商業施設の共通環境は、デザインも素材使いもダイナミックかつ豪華なものが目を引く。



▲『華山 1914 文創園區』は日本統治時代の酒工場をコンバージョンした施設。



◀街中の複数のエリアで毎朝開かれる朝市は専門店が多く立ち並び、生鮮食品やテイクアウトの食が中心となっている。一部では衣料品や雑貨も扱う。



◀『寧夏夜市』など市内の夜市は毎晩開かれ、一部観光色の強いものもあるが地元の人も日常的に利用している。

どこで買う？

台北での一般的な若者の生活を聞くと東京の現状と近く、インカムはあまり高くないものの賃料が高いため、どうしても『衣・食・住』のうち『衣』や『食』は節約をせざるを得ないのが現状という。

しかし、今回の街調査では、そんな中でもショッピングを楽しむ人々の活気が見られた。そのように見えるのは、国民性やマインドによるところだけではなく、商業の場にもヒントがあるのではないだろうか？ 実際に台北の人々はどこで買い物しているのか？ 街をどのように使い分けているのか？ 一般的な若者のファッションを切り口として3つの街を調査した。

3つの街からわかること

今回クローズアップしたのは、先述の④にあたる東区、富錦街。それに、⑤にあたる師範大学エリア（師大夜市）。それぞれの詳細は次ページ以降で紹介するが、これらの街の特徴から以下の3点の【商業のヒント】を見つけた。

01.HIGH からプチプラまで『街歩き』で楽しめる。

日本の商業施設のような厳密なセグメントで分断されていない状況が逆に『街歩き』の楽しみとなり、いろいろなファッションを知ってチャレンジする機会の創出に。

02. 独特のショッピングスタイルが商業の場をより気軽に日常的に。

普段着感覚でテイクアウトの飲み物を飲みながら、友達とファッションアイテムをチェックしながらあれこれおしゃべりする。日常の中で気軽に楽しめるスタイルが、高頻度タッチポイントの創出に。

03. ○○&△△のシームレスな掛け合わせが魅力的な深度化表現。

物販とスタジオ、レコードとカフェのような2つ以上のコンテンツを併設した店舗はそのブランドの世界観やコンセプトをより深く伝えるのに有効な手段として台北でも増加傾向。

以上のように、供給者目線でのコントロール下にある商業ではなく、生活者目線で選んで自由に楽しんだり偶発的にミックスして楽しめる余白の部分が台北の街歩きには散りばめられている。それが最大の魅力のひとつであり、街歩きをしてショッピングを楽しむ有効な動機づけになっているように感じた。

日本の商業施設は売上高が最大の評価基準であり、綿密なコントロールのもと商業の効率化や最適化を進めている。しかしその最適化をすればするほど生活者からは画一化して見えてしまい、ますます商業の「場」としてわざわざ出向く必要がないと感じられるものへと向かっている感がある。これは商業施設の目標達成や昨対超えが難しいという現実の一因になっているのではないだろうか？ 余白を無駄とせず含んで考えることや、街が内包する余白の部分を活かした賑わい創りといった視点が、今後は商業施設づくりにも求められるようになるだろう。

最後に次ページからは、今回クローズアップしたエリアごとに、その特徴と来街者について、街の魅力要素の分析と共にご紹介したい。



▲街路を歩く若者を観察すると、男女ともにショッピングバッグを複数もつ人が多く、街歩きからショップに入って実購買につながっている雰囲気を感じる。

雨軒・Discovery Channel

台湾経由で、日本商業の魅力を広く華人マーケットに伝えよう！

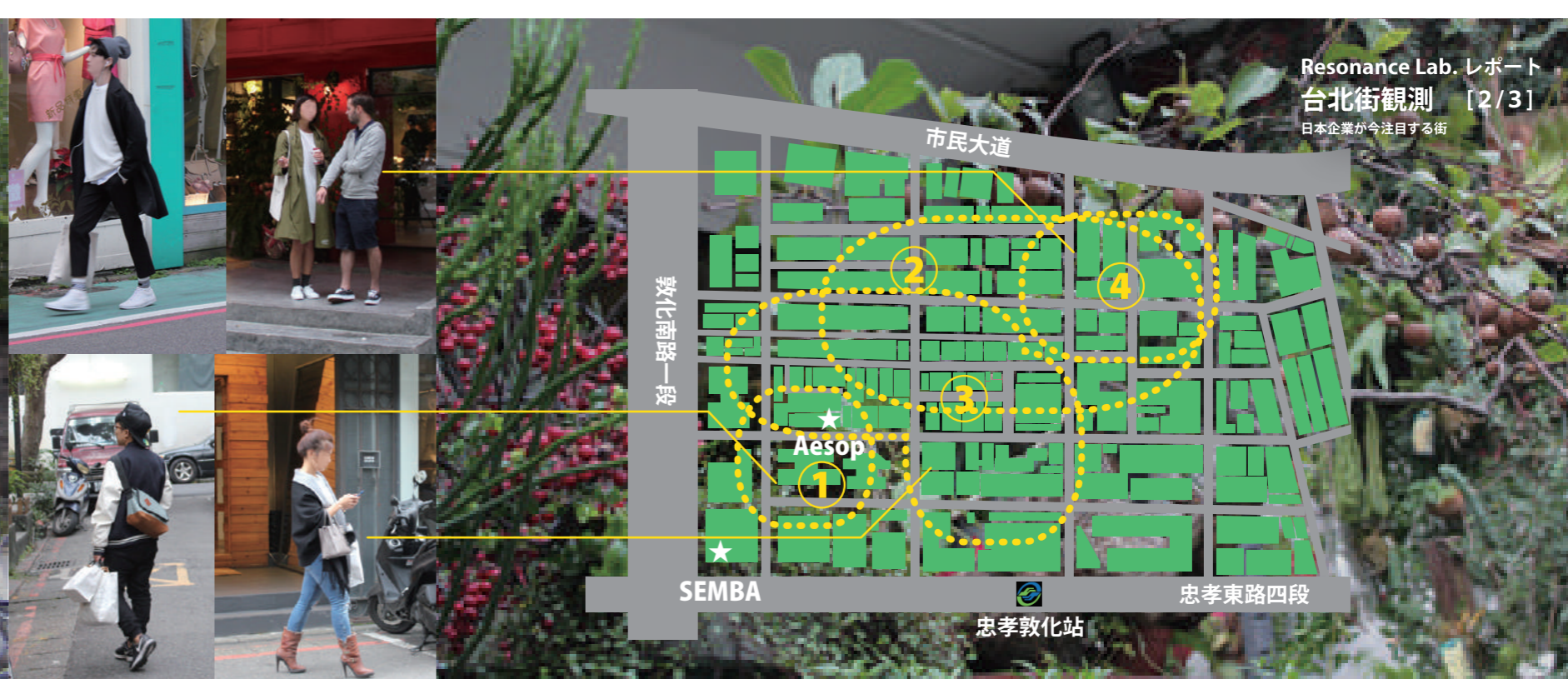
台湾は他の中華圏と言語だけでなく、文化、ライフスタイルなど多くの共通点を持っており、台湾で受け入れられるテイストは大陸を含む華人マーケットにも受け入れやすい。例えば、上記の【商業のヒント】02は台湾だけではなく、大陸でも日常的に好まれるショッピングスタイルだ。世界規模で見ると台北のマーケットはそれほど大きくないが、そこでの挑戦は日本の商業の魅力を広く中華圏に伝え拡大する際の重要な役割を担っているのではないだろうか！

東区 (忠孝東路四段付近)

地下鉄忠孝敦化駅の上の大通りはユニクロやZARAの大型店といったナショナルブランドが並ぶ商業地。

一方、通りを一本入ると小型路面店が軒を連ねるエリアが東西南北5本ほどの範囲で広がっている。

韓国ファッションをはじめとする安くて流行感度の高いショップから、世界的な流行を見せるアスレジャーファッションやハイファッションのセレクトも点在する。台北のおしゃれさんが集まる街。



① 台北イチ旬なファッションエリア

世界各都市の旬な街に立地する『Aesop』の旗艦店。『LULU LEMON』や『NIKE』『adidas』といったアスレジャーのナショナルブランドもこのエリアに集中している。台北イチのファッションエリアとして認知されている裏付けとも言える。



世界的な流行を見せているアスレジャーブランド。台湾での旗艦店を出店するのに適した立地としてこのエリアが選ばれ、続々開業。

② 既存の建築と緑にファッションが調和する街並み

路面店のほとんどが、古くからある住宅やオフィスビルの1F。古い建築はデザインや使われているタイルや金物にも味があり、生命力ある緑との調和が美しい。台北らしさと今のファッションが調和した魅力的な街並みとなっている。



駐車場横のビルには大型のペインティング。

ショップの上層階はオフィスや集合住宅の場合が多い。壁面のタイル、格子の装飾やベランダの植栽も街の味になっている。

③ 流行を手軽に楽しむ韓国ファッションは台北でも人気

小さな路面店が密集するエリア。中でも手軽に流行アイテムが揃う韓国ブランドは台北でも人気。着こなしが難しく敬遠されがちなビビッドな蛍光カラーや攻めのデザインアイテムも台北の女の子は果敢にチャレンジ！



1店舗の間口は狭いが、その様々なテイストやデザインの店が密集。自分好みを探しに、多くの若い女性が街歩きを楽しんでいる。

④ 上級者向けが揃うハイファッションエリア

一番北側のエリアは緑も多く落ち着いていて、ハイファッションのセレクトやオープンカフェには台湾ファッションニスタの姿。一方、狭い路地には個性的な路面店が並び、エリア内でもよりおしゃれ上級者が足を運んでいる。



ハイブランドを揃えたセレクトやゆったりとしたカフェが緑の多い通りに面する。路地裏にはひっそりと個性際立つブランドも。

師大夜市 (台湾師範大学付近)

師範大学近くの師範夜市は夕方から深夜にかけて毎日開かれる。「朝市、夜市」といった「市場」が日常の中にあり、そこに安くおいしい屋台グルメと安く流行のファッションの専門店が隣り合う。台北ならではの光景が広がる。



富錦街 (台北市北部旧居留地エリア)

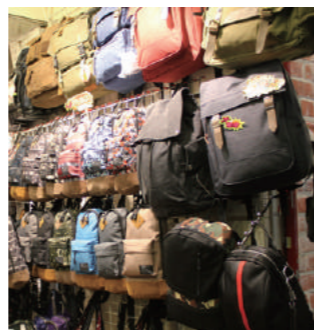
米軍の居留地だったこの街は中心部に近いながらも、街路樹が多く残る住宅街。建物が道路からセットバックするよう計画され、ゆったりとしたアプローチやテラスが落ち着いた雰囲気。近年オープンカフェやセレクトショップが増えたことで、ハイセンスな街として人気が高まっている。



Resonance Lab. レポート
台北街観測 [3/3]
日本企業が注目する街

学生街の夜市は プチプラファッションの宝庫

師大夜市は学生街にあることから飲食店だけではなく、若い人向けのファッション関連の店が多いのが特徴だ。レディースアパレルを中心に、靴、帽子やストールなど単品アイテムの専門店が多く、価格も学生が買える値段。来街者は学生が大半で、スニーカー&リュック率が高い。テイクアウトの飲み物を飲みながら友達とファッションアイテムをチェックする女性たちはとても楽しそうな雰囲気。商業施設や東区エリアに比べると日常感が強く、普段着感覚で「食」を片手に「衣」を楽しむという、日本人から見ると新鮮なショッピングのスタイルが見られた。



夕方 17 時頃から開かれる夜市では、ファッションの専門店とテイクアウトの屋台が隣り合い、道路との境目もシームレス!!

カフェを中心に発展中の ライフスタイル高感度エリア

この街に暮らすこと自体がファッションとなるような感度の高いショップやオフィスが点在する住宅街。2012年にセレクトショップ『Fujin Tree355』がオープンしたのをきっかけにカフェを中心にファッション、インテリア、レコード、サイクル、スクール等専門性の高いこだわりの店が集まり、台北の中でも発信力の高い街となっている。また、MIT (made in TAIWAN) ブランドの発信も多く、自国のデザインや品質の良さを再重要視する傾向も日本と通ずるところだ。アートやデザインの事務所やショールームも増え、ハイセンスな「働・住・遊」の街として人気が高まっている。



デザインオフィスとカフェ、物販とスタジオ、レコードとカフェのような2つ以上のコンテンツを併設した店舗が多いのも特徴。平均単価は高いものの、アパレルだけでなく各分野のこだわりのショップが多数。

※写真はすべて筆者撮影による

SEMBA Resonance Lab.
URL: <http://www.sembla1008.co.jp/>